李文馥系の「二十四孝」と『日記故事』

佐藤トゥイウェン

"*The Twenty-four Filial Exemplars*" belong to Ly Van Phuc sections and *Diary of Historical Events*

SATO Thuy Uyen

In Nguyen Dynasty, Ly Van Phuc adapted the Chinese "The Twenty-four Filial Exemplars", which belong to Diary of Historical Events (『日記故事』) sections into "The Twenty-four Filial Exemplars" by Nom script under a form of poetry called "seven-seven-six-eight" (「双七六八体」). At present, there are 29 documents related to "The Twenty-four Filial Exemplars" in Vietnam. Among them, there are 17 documents belong to Ly Van Phuc sections. The representative documents of Diary of Historical Events (『日記故事』) sections are万暦三十九年版、寛文九年版、二十四孝原編、『超子固二十四孝書画合壁』、「二十四孝原本」. In this paper, we compare five representative documents of Diary of Historical Events (『日記故事』) sections, we pointed out that the「二十四孝原本」is an original document of "The Twenty-four Filial Exemplars" which belong to Ly Van Phuc sections. However we can say that they were not observed as an original text.

"The Twenty-four Filial Exemplars" which belong to Ly Van Phuc section referred not only「二十四孝原本」but also used another documents. It can be said making the characteristics of Vietnamese style.

キーワード：李文馥、字喃、二十四孝、日記故事、

Lý Văn Phức, chữ Nôm, Nhị thập tứ hiếu, Nhật ký cố sự

はじめに

ベトナムにおける「二十四孝」文献は李文馥系が最も多く占めるが、それは中国の『日記故事』系に属するものである。『日記故事』系の代表的な文献は万暦三十九年版、寛文九年版、「二十四孝原編」、『超子固二十四孝書画合壁』、および「二十四孝原本」がある[1)]。

本稿では前半および後半に分けて論じる。前半では李文馥が編纂した『掇拾雑記』所収の「二十四孝演歌」の本文を『日記故事』系の代表的な五つの文献と比較し、どれが李文馥系「二十四孝」の底本であるのか、加えて、どの文献が参照されているのかを明らかにしたい。

1) 黒田彰『孝子伝の研究』佛教大学鷹陵文化叢書５（思文閣出版、2001年）、101頁、405頁。

次に、後半では図版を考察する。李文馥系「二十四孝」文献のうち、ベトナム社会科学情報院蔵*Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）（Nam Định印刷所、1908年）、および『四十八孝詩畫全集』のみが「二十四孝」の図版を載せている。このうち、『四十八孝詩畫全集』は朱文公「二十四孝原編」と高月槎「二十四孝別集」に従い作成されたものであるため、李文馥系「二十四孝」とは異なっている。一方、*Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）（Nam Định印刷所、1908年）は、李文馥の「二十四孝演歌」を現代ベトナム語で記すとともに図版も載せており、李文馥系の「二十四孝」に属する。そこでここでは*Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）（Nam Định印刷所、1908年）をとり上げ、それを『日記故事』系の他の文献の図版と比較することで、李文馥系「二十四孝」の図版の底本および参照した文献が何であったかを明らかにしたい。

一.『日記故事』系の各文献について

1．万暦三十九年版

万暦三十九年版『日記故事』の書名は『新鐫徽郡原板校正繪像註釋便覽興覧日記故事』一巻である。本書の内題は「鍥便象二十四孝日記故事」とし、尾題に「全像二十四孝畢」とある。本書は現在、日本の国立公文書館内閣文庫に所蔵され、詹應竹校正、黄正甫梓行により、万暦三十九年（1611）に刊行された。各頁は上下二つの部分に分かれ、上は図版、下は本文と題詩である。上部と下部には二人分の孝子の説話の本文、題詩と図版を載せている（図1参照）。

2．寛文九年版

寛文九年版『日記故事』の書名は、『新鍥類解官様日記故事大全』（長沢規矩也編『和刻本類書集成』第三輯の所収）である。明の張瑞によって編纂されたもので、この和刻本は明萬暦刊繡像本の精密な覆刻本であり、寛文九年（1669）に刊行された[2]。各頁は上下二つの部分に分かれている。上は図版、下は本文と題詩であり、各頁に一人ずつ載せている（図2参照）。

3．「二十四孝原編」

「二十四孝原編」は民国の林仕荷編にかかる『三餘堂叢刻』[3] 五冊のうち、第一冊の冒頭に収められている。『三餘堂叢刻』については、『中国叢書綜録』（中華書局、1959年）第一冊、彙編・雑纂類（民国）に、「（民国）林仕荷輯、民国十六年（1927）鄞県林氏拠旧刊版彙印本」とあるが、『三餘堂叢刻』は、『中国叢書綜録』の収蔵情況表、蔵書者欄に表示される華東師範大学に一本が所蔵されるほか、目下のところ北京師範大学に一本の所在を確認し得るのみの稀覯書となっている。『三餘堂叢刻』は、浙江省鄞県の古書肆であった林仕荷（彬甫）の蒐集にかかる旧書、十二種十七巻を叢刻し、民国十六年（1927）に刊行したものである[4]。

2）長沢規矩也編『和刻本類書集成』第三輯（古典研究会、昭和52年）、解題参照。

3）本学の吾妻重二先生と復旦大学の呉晨先生の協力を得て『三餘堂叢刻』を複写できた。お礼を申し上げたい。

4）黒田彰『孝子伝の研究』佛教大学鷹陵文化叢書5（思文閣出版、2001年）、400～401頁。

図１　『新鐫徽郡原板校正繪像註釋便覽興覧日記故事』第２葉表。

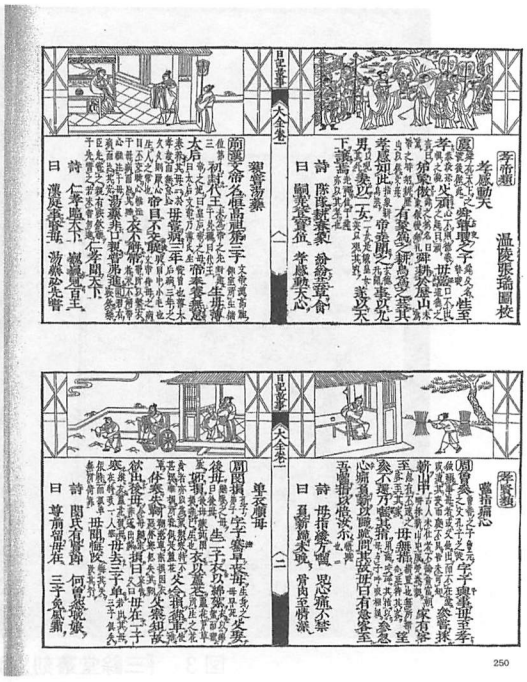


図２　『和刻本類書集成』250頁。

『日記故事』系の五つの文献のうち、『三餘堂叢刻』は最近の書籍（1927）である。ベトナムにおける「二十四孝」の漢字･字喃文献はすべて1927年前に刊行されたものである。鄧輝熺によって編纂され、嗣徳二十年（1867）に刊行された『四十八孝詩畫全集』の「四十八孝詩畫全集序」に「丁巳春余試和榮得李文禎□□前後二十四孝詩畫」[5] とあり、さらに「詠前後二十四孝原序」には、「歳之春、李茂瑞兄子禎送以前後二十四孝二本、一是朱文公原編、一是高月槎先生別集、皆一詩一畫」[6] とある。すなわち、鄧輝熺は嗣徳丁巳（1857年）に『前後二十四孝』に収められている朱文公「二十四孝原編」と高月槎「二十四孝別集」を李文禎から得たわけであるから、『前後二十四孝』所収の「二十四孝原編」と「二十四孝別集」は、1857年以前のものであると推測できる。また、「二十四孝原編」と「二十四孝別集」は撰者が異なることから、もともと別行していたのであろう。そうであれば、これらの成立年代はもっと遡る可能性がある。しかし、現在見ることのできる「二十四孝原編」は、『三餘堂叢刻』所収本のみである。目下のところ、『三餘堂叢刻』所収本よりも古い「二十四孝原編」は見あたらないのである。

「二十四孝原編」は一頁に一人の孝子の説話の図版を載せ、次の頁に本文、題詩を載せている（図３参照）。

『三餘堂叢刻』目録には、「二十四孝原編一巻　宋朱熹」とある。「二十四孝原編」の作者については梁音氏が、「「朱子二十四孝事績」は「二十四孝原編」と同じように、朱熹撰と伝えられるが、朱熹に関する資料に見られないため、朱熹が撰した確証は得られない。しかし、「二十四孝原編」と同様に朱熹に仮

5）ハノイ漢喃研究院蔵『四十八孝詩畫全集』（AC.16）、第１葉表。

6）ハノイ漢喃研究院蔵『四十八孝詩畫全集』（AC.16）、第３葉裏。

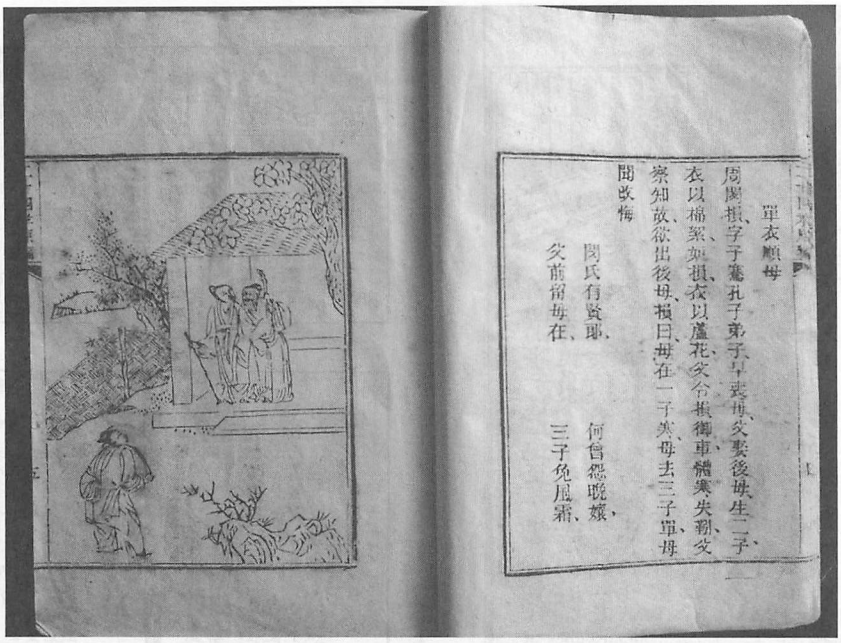


図3 『三餘堂叢刻』第6葉裏、第7葉表。

託することは興味深い」[7] と述べている。

4.『趙子固二十四孝書画合璧』

『趙子固二十四孝書画合璧』の著作年代および同書の伝来について、黒田彰氏は、

『趙子固二十四孝書画合璧』は外題刷題箋を「趙子固二十四孝書画合璧」とするコロタイプ影印本（縦三八・五糎横二六・八糎）一冊、袋綴二十六丁で、奥付に、「中華民国二十二年十月初版/趙子固二十四孝書画合璧/（毎部一冊定価洋四円）/宝蘊楼蔵/北平古物陳列所印行/印刷所集成印書局/発行所北平古物陳列所、〔横書〕不准複製」とある。発行所の古物陳列所、所蔵者とされる宝蘊楼のことを簡単に纏めておくと、一九一二年二月十二日、宣統帝溥儀の退位に際し、中華民国は内務部に古物陳列所を設置、紫金城外朝、奉天、熱河行宮等の文物管理に当たらせるが、一九二四年十一月五日、溥儀の紫金城退去に伴って、二十日に弁理清室善後委員会を発足させ、それが翌一九二五年九月、故宮博物院となる。宝蘊楼（元は、外朝の武英殿右の建物の名）は古物陳列所のことで、一九二九年から蔵品の印刷、発行に当たったらしい。……『趙子固二十四孝書画合璧』は万暦以前、おそらく明代中期から後期にかけての制作と考えることが出来る[8]。

と説明している。

7）梁音「『朱子二十四孝事蹟』について」『名古屋短期大学研究紀要』第40号（名古屋短期大学、2002年）、290頁。

8）黒田彰『孝子伝の研究』佛教大学鷹陵文化叢書5（思文閣出版、2001年）、406～407、411頁。

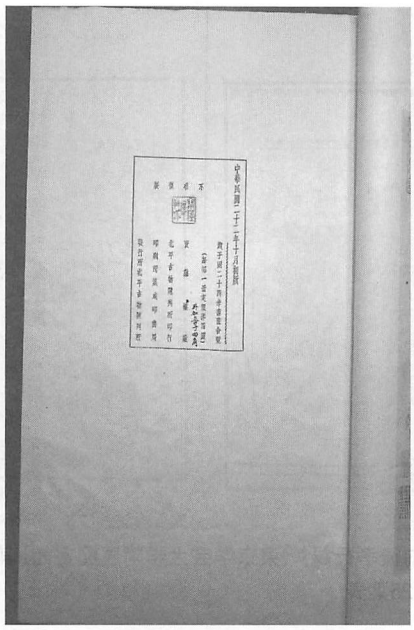


図４　ハーバード大学図書館所蔵『趙子固二十四孝書画合璧』の奥付

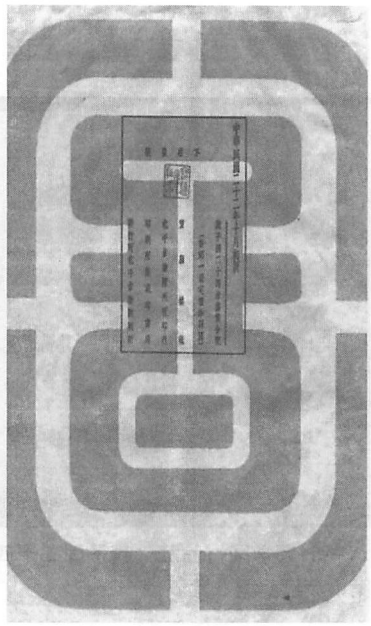


図５　中国国家図書館の別館に所蔵されている『趙子固二十四孝書画合璧』の奥付

筆者が複写したハーバード大学図書館所蔵の『趙子固二十四孝書画合璧』[9]は、中国国家図書館所蔵の『趙子固二十四孝書画合璧』と違う点が一つある。それは奥付の（毎部一冊定価洋四円）/宝蘊楼蔵の間に「外加套子四角」と手書きで書き加えていることである。

本書は一頁に一つの説話の図版を載せ、次の頁（裏頁）は本文、題詩である（図４、図５、図６参照）。

５．「二十四孝原本」

「二十四孝原本」は『前後孝行録』に収められている。『前後孝行録』は「道光甲辰年春敬募重鐫」、すなわち道光二十四年（1844）に京江柳書諫堂で再版されたテキストが伝わっている。『前後孝行録』の「孝行録序」には、「高君月槎復別録二十四事以廣之。又毎事繫之一詩以致其長言詠歎之意。……道光元年十月呉門石韞玉序」[10]とあり、さらに、跋文が二篇付されている。一つ目の跋文には、「余弟黙盦輯孝行録一書刊以勸世……道光二年春王正月呂泰運書」[11]とあり、二つ目の跋文には「道光元年正月人日呂晋昭跋於莱香堂」とある。

このように、『前後孝行録』の初版は道光二年（1822年）に呂晋昭によって出版された。そして『前後

9）筆者は中国国家図書館で『趙子固二十四孝書画合璧』を複写したが貴重な資料なので中国国家図書館の別館に所蔵され、三分の一しか複写許可を得られなかった。筆者の調査により、『趙子固二十四孝書画合璧』は中国以外、アメリカのハーバード大学の図書館に所蔵されているのがわかったため、筆者はアメリカに資料調査に出向いた。幸いにコーネル大学のNidhi Mahadjan氏の協力を得てハーバード大学図書館蔵『趙子固二十四孝書画合璧』の全文を複写できた。

10）『前後孝行録』（東京学芸大学附属図書館の電子文）、第２葉裏、第３葉表裏。

11）『前後孝行録』（東京学芸大学附属図書館の電子文）、第７葉裏、第８葉表。

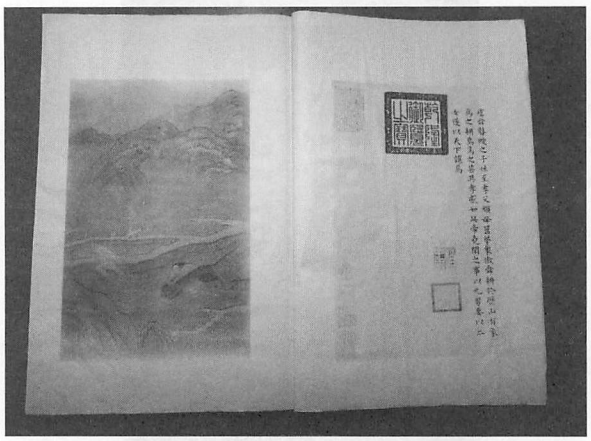


図6　ハーバード大学図書館蔵『趙子固二十四孝書画合壁』第1葉裏、第2葉表

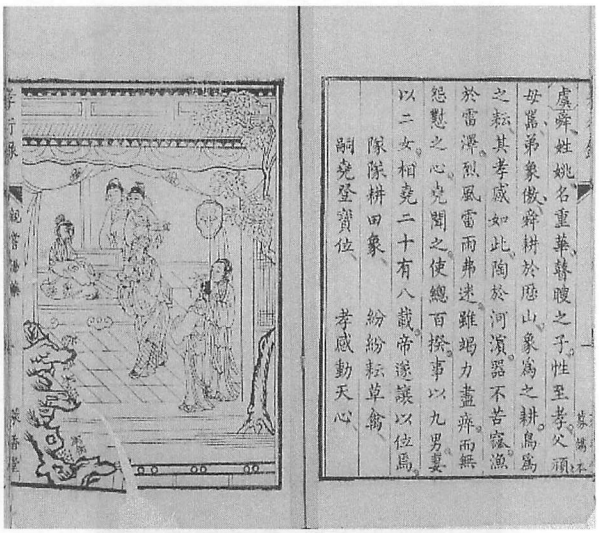


図7　『前後孝行録』（東京学芸大学附属図書館）第25葉裏、第26葉表

孝行録』所収の「二十四孝別録」は、高月槎によって編纂されている。『前後孝行録』は「孝行録序」、「孝行録目録」、「文昌帝君孝経」、「二十四孝原本」、「二十四孝別録」という順序で構成されている。一頁に一人の孝子の説話の図版を載せ、次の頁は本文、題詩である（図7参照）。

本稿で使用する「二十四孝原本」は、東京学芸大学附属図書館蔵『前後孝行録』（道光甲辰年春敬募重鐫、京江柳書諫堂）に所収のものである（画像のみ）。このほか、中国でも影印本が出版されている。上海文芸出版社の『前後孝行録』（1991年）がそれであるが、「文昌帝君孝経」を末尾に載せている[12]。

二．李文馥系の「二十四孝」と『日記故事』系の各文献の比較——本文について

本章では、李文馥系の「二十四孝」（『掇拾雑記』所収「二十四孝演歌」）と『日記故事』系の国立公文書館内閣文庫に所蔵される万暦三十九年版、寛文九年版、「二十四孝原本」（『前後孝行録』、東京学芸大学附属図書館の画像、道光甲辰年春敬募重鐫、京江柳書諫堂）、ハーバード大学図書館に所蔵される『趙子固二十四孝書画合壁』、華東師範大学所蔵『三餘堂叢刻』の所収の「二十四孝原編」を比較する。『日記故事』系の各文献と24人の孝子の順序、本文、図版について、比較表を用いて考察する（表1参照）。

比較する際、以下の略称を用いる。『掇』：『掇拾雑記』、『原本』：「二十四孝原本」、『万』：万暦三十九年版、『寛』：寛文九年版、『原編』：「二十四孝原編」、『壁』：『趙子固二十四孝詩画合壁』。

12）本書は吾妻重二先生が所蔵する。

1．孝子の順序の考察

表１の上欄は『掇』「二十四孝演歌」による孝子名である。

表１　二十四人の孝子の順序

	大舜	漢文帝	曾参	閔損	仲由	郯子	老萊子	董永	郭巨	姜詩	蔡順	丁蘭	陸績	江革	黄香	王裒	呉猛	王祥	楊香	孟宗	庾黔婁	唐夫人	朱寿昌	黄山谷
掇	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
原本	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
万	1	2	3	4	5	7	13	6	12	19	23	17	9	8	22	16	11	20	14	18	21	10	15	24
寛	1	2	3	4	5	7	17	6	13	20	18	22	9	8	19	21	11	12	14	23	16	10	15	24
原編	1	2	3	4	5	7	6	8	13	11	15	12	16	9	10	17	20	19	14	18	21	22	24	23
壁	1	2	20	16	11	10	12	7	5	23	18	8	15	14	21	6	17	4	2	3	19	22	9	24

表１により、『掇拾雑記』所収「二十四孝演歌」の二十四孝の孝子の順序は、「二十四孝原本」（『前後孝行録』所収）と一致することがわかる。

2．本文の考察

以下にとり上げる孝子の順序は『掇』の「二十四孝演歌」での順番による。六つの文献を見ると、異同がいくらかがある。『原本』は『原編』と同様、題詩（五言詩）の前に「詩曰」の文字がない。『掇』は『壁』と同様、題詩が記されていない。『壁』、『原本』にはそれぞれの説話の初めに「孝感動天」などの標題がないが、他の四文献には載っている。これらはすべての説話においても同じである。なお、『掇』の本文の後に題詩は記されていないため、ここでは本文（散文部分）を中心に比較する。本稿では紙幅の関係上、第一、第六、第十六、第十九および第二十の説話、すなわち帝舜、郯子、王裒、楊香、孟宗の説話（本文、図版）をとり上げ、考察してみたい。

第一　大舜

掇	孝感動天 虞舜、瞽瞍之子。母握登賢而早喪瞽瞍更娶後妻、父頑母嚚、弟象傲。克諧以孝、嘗耕於歴山、有象為之耕、鳥為之耘、其孝感如此。堯聞之、妻以二女、譲以天下。
原本	虞舜、姓姚名重華。瞽瞍之子、性至孝、父頑母嚚、弟象傲。舜耕於歴山、象為之耕、鳥為之耘、其孝感如此。陶於河濵、器不苦窳。漁於雷澤、烈風雷雨、弗迷。雖竭力盡瘁而無怨懟之心。堯聞之、事總百揆。事以九男、妻以二女、相堯二十有八載、帝遂譲以位焉。 隊隊耕田象　紛紛耘草禽 嗣堯登寶位　孝感動天心
万	孝感動天 虞舜、瞽瞍之子、性至孝、父頑母嚚、弟象傲。舜耕于歴山、有象為之耕、有鳥為之耘、其孝感如此。由是、帝堯聞之、妻以二女、譲以天下。 詩曰 隊々耕春象　紛紛耘草禽 嗣堯登寶位　孝感動天心

寛	孝感動天 虞舜、瞽瞍之子、性至孝、父頑母嚚、弟象傲。舜耕於歴山、有象為之耕、鳥為之芸、其孝感如此。帝堯聞之、事以九男、妻以二女、遂以天下譲焉。 詩曰 隊隊耕春象　紛紛芸草禽 嗣堯登寶位　孝感動天心
原編	孝感動天 虞舜、姓姚名重華。瞽瞍之子、性至孝、父頑母嚚、弟象傲。舜耕於歴山、象為之耕、鳥為之耘、其孝感如此。陶於河濱、器不苦窳。漁於雷澤、烈風雷雨、弗迷。雖竭力盡瘁而無怨懟之心。堯聞之、事總百揆。事以九男、妻以二女、相堯二十有八載、帝遂譲以位焉。 隊隊耕田象　紛紛耘草禽 嗣堯登寶位　孝感動天心
壁	虞舜、瞽瞍之子、性至孝、父頑母嚚、弟象傲。舜耕於歴山、有象為之耕、鳥為之芸、其孝感如此。帝堯聞之、事以九男、妻以二女、遂以天下譲焉。

『原本』は『原編』と同様、詳しい記述（傍線の部）となっているが、『掇』にそれらの部分は見えない。『掇』は『万』と同じく、「事以九男」が見られない。そして、『掇』は「母握登賢」、「而早喪、瞽瞍更娶後妻」、「克諧以孝」とあるが、他の文献にこの句はない。しかし、「而舜母死、瞽叟更娶妻而生象」は『史記』五帝本記に、「克諧以孝」は『尚書』に記されている。「母握登賢」は『尚書』、『史記』五帝本記、『孟子』などの帝舜の説話を掲載したテキストに見えないため、李文馥が加えた解説文と思われる。『掇』は『原本』、『原編』と同様に、「堯聞之」とし、他の文献は「帝堯聞之」とする。『掇』は『万』、『原本』、『原編』と同じく、「鳥為之耘」とし、『寛』と『壁』は「鳥為之芸」とする。『掇』は『万』と同様で、「譲以天下」とし、『寛』は『壁』と同様に、「遂以天下譲焉」とし、『原編』は『原本』と同様に、「帝遂譲以位焉」とする。

要するに、上記の五つ文献のうち、『掇』に最も近いのは『万』といえるが、李文馥が加えた解説文があることを確認できる。そして、『掇』は『原本』、『原編』に記されている詳しい文（傍線の部）を除けば、『原本』、『原編』とも類似していると指摘できる。しかし、上記の表1により、『掇』に記されている孝子の順序配列は『万』、『原編』と一致せず、『原本』と一致することから、李文馥は『原本』にもとづき書き改めたが、その際『原編』、『万』などの他の文献を参照したといえる。また、『掇』は説話のシナリオを守りつつ細かな部分を省略する傾向があると指摘できる。

第六　郯子

掇	鹿乳奉親 周郯子、性至孝、父母年老、俱患雙眼、思食鹿乳、郯子順承親意、乃衣鹿皮、去深山、入鹿群之中、取鹿乳以供親、獵者見而欲射之、郯子以情告。乃免。
原本	周郯子、性至孝。父母年老、俱患雙眼、思食鹿乳、郯子順承親意、乃衣鹿皮。去深山、入羣鹿中、取鹿乳以供親。獵者見而欲射之、郯子具以情告。乃免。 老親思鹿乳　　身挂鹿毛衣 若不高聲語　　山中帯箭歸

万	鹿乳奉親 剡子、性至孝。父母年老、俱患雙眼、思食鹿乳。剡子乃衣鹿皮。去深山、入鹿群之中、取鹿乳供親。獵者見而欲射之。剡子具以情告、乃免。 詩曰 親老思鹿乳　身掛褐毛衣 若不高聲語　山中帯箭歸
寛	鹿乳奉親 周剡子、性至孝。父母年老、俱患雙眼、思食鹿乳。剡子乃衣鹿皮。去深山、入鹿群之中、取鹿乳供親。獵者見而欲射之、剡子具以情告、乃免。 詩曰 親老思鹿乳　身掛褐毛衣 若不高聲語　山中帯箭歸
原編	鹿乳奉親 周郯子、性至孝。父母年老、俱患雙眼、思食鹿乳、郯子順承親意、乃衣鹿皮。去深山、入鹿羣中、取鹿乳以娛親。獵者見而欲射之、郯子具以情告。乃免。 老親思鹿乳　身掛鹿毛衣 若不高聲語　山中帯箭歸
璧	周剡子、性至孝。父母年老、俱患雙目、思食鹿乳、剡子乃衣鹿皮、去深山、入鹿群之中、取鹿乳供親。獵者見而欲射之、剡子具以情告。乃免

『掇』は『原本』、『原編』と同様に「周郯子」とし、『寛』と『璧』は「周剡子」とし、『万』は「剡子」とする。『掇』は『万』、『寛』、『原本』、『原編』と同様に「眼」とし、『璧』のみは「目」とする。『掇』には『原本』、『原編』と同様に、「順承親意」という句が見られるが、他の三文献にはない。『掇』は『万』、『寛』、『璧』と同様に「群」とし、『原本』と『原編』は「羣」とする。『掇』は『原本』と同じく「以供親」とし、『万』、『寛』、『璧』は「供親」とし、『原編』は「以娛親」とする。『掇』は『原本』とほぼ同文といえる。

第十六　王裒

掇	聞雷泣墓 魏王裒、字偉元。王儀之子、儀為司馬昭所殺。後晋簒位。裒終身不西向坐、示不臣晋也。隠居墓側、攀柏涕泣著樹、樹為之枯。母存日、性畏雷。既卒、葬於山林。毎遇風雨、聞阿香響震、即奔至墓。拜泣告曰、裒在此、母勿懼。教授、讀詩至哀哀父母、生我劬勞、遂三復流涕。門人廢蓼莪之篇。
原本	魏王裒、字偉元。事親至孝。母存日、性畏雷。既卒、葬於山林。毎遇風雨、聞雷、即奔墓所。拜泣告曰。裒在此、母勿懼。隠居教授。讀詩至哀哀父母、生我劬勞。遂三復流涕。後門人至廢蓼莪之篇。 慈母怕聞雷　氷魂宿夜臺 阿香時一震　到墓遶千回
万	聞雷泣墓 魏王裒、字偉元。事親至孝。母存日、性怕雷。既卒、裒殯葬於山林。毎遇風雨、聞阿香响震之聲、即奔至墓所。拜跪泣告曰、裒在此、母親勿懼。 詩曰 慈母怕聞雷　氷魂宿夜臺 阿香時一震　到墓遶千回

寛	聞雷泣墓 魏王裒、事親至孝。母存日、性怕雷。既卒、殯葬於山林。毎遇風雨、聞阿香响震之聲、即奔至墓所。拜跪泣告曰、裒在此、母親勿惧。 詩曰 慈母怕聞雷　氷魂宿夜臺 阿香時一震　到墓遶千回
原編	聞雷泣墓 魏王裒、字偉元。事親至孝。母存日、性畏雷。既卒、葬於山林。毎遇風雨、聞雷、即奔墓所。拜泣告曰、裒在此、母勿懼。隱居教授。讀詩至哀哀父母、生我劬勞。遂三復流涕。後門人至廢蓼莪之篇。 慈母怕聞雷　氷魂宿夜臺 阿香時一震　到墓遶千回
壁	魏王裒、事親至孝。母存日、性懼雷。既卒、殯葬於山林。毎遇風雨、聞阿香嚮震之聲、即奔至墓所。拜跪泣告曰、裒在此、母勿懼。嘗讀詩至哀哀父母、生我劬勞、未嘗不三復流涕。門人並廢蓼莪之篇。

『掇』には『原本』、『原編』、『万』と同様に「字偉元」とあるが、『寛』と『壁』にこの文字はない。『掇』は『原本』、『原編』と同じく「性畏雷」、「拜泣告曰」とし、『万』、『寛』、『壁』では「性怕雷」、「拜跪泣告曰」とする。『掇』は「聞阿香響震」、『原本』、『原編』は「聞雷」、『万』、『寛』は「聞阿香响震之聲」、『壁』は「聞阿香嚮震之聲」とする。『掇』は「即奔至墓」とあるが、『原本』、『原編』では「即奔墓所」とし、『万』、『寛』、『壁』では「即奔至墓所」とする。『掇』は『原編』、『原本』、『壁』と同様に、より詳しい文（傍線の部）があるが、この部分は『万』と『寛』にはない。『掇』には「王儀之子、儀為司馬昭所殺。後晋簒位。裒終身不西向坐、示不臣晋也。隱居墓側、攀柏涕泣著樹、樹為之枯」という長文があるが、他の文献にはない。この文は、関西大学図書館蔵『百孝圖説』に引用された『晋書』孝友傳の「王裒」[13] や、『小学』外篇・善行・實明倫の記述によるものである。この文を除けば、『掇』は『日記故事』系の五つの文献のうち、『原本』、『原編』と最も類似しているといえるが、李文馥が加えた詳しい解説文があることも確認できる。

第十九　楊香

掇	搤虎救親 晋楊香、年十四歳。嘗隨父豊往田中穫粟。父為虎曳去。香手無寸鉄。踊躍向前。搤持虎頸。虎磨无而逝。
原本	晉楊香、年十四歳。隨父豐往田中穫粟。父為虎曳去。時香手無寸鐵、惟知有父、而不知有身。踊躍向前。搤持虎頸。虎磨无而逝。父因得免於害。 深山逢白額　努力搏腥風 父子俱無恙　脱離饞口中
万	搤虎救親 楊香、年十四歳、嘗隨父豊往田穫粟。父為虎曳去。時香手無寸鉄、惟知有父、而不知有身。踴躍向前、搤持虎頸。虎亦曳去而逝。父因得免於害。 詩曰 深山逢白額　努力搏腥風 父子俱無恙　脱身饞口中

13）関西大学総合図書館蔵『百孝圖説』巻二亨冊（LM2*ほ*23*18-1）、第2葉表。

寛	搤虎救親 晋楊香、年十四歳、嘗隨父豊往田穫粟。父為虎曳去。時楊香手無寸鉄、惟知有父、而不知有身。踴躍向前、搤持虎頸。虎亦靡然而逝。父纔得免於害。 詩曰 深山逢白額　努力搏腥風 父子俱無恙　脱離饞口中
原編	搤虎救親 晉楊香、年十四歳、隨父豐往田中穫粟。父為虎曳去。時香手無寸鐵、惟知有父、而不知有身。踊躍向前、搤持虎頸。虎磨旡而逝。父因得免於害。 深山逢白額　努力搏腥風 父子俱無恙　脱離饞口中
璧	晉楊香、年十四歳。嘗随父豐往田穫粟。父為虎曳去。時楊香手無寸鐵、惟知有父、而不知有身。踴躍向前。搤持虎頸。虎亦摩旡而逝。父因得免於害。

『掇』は『寛』と同様に「晋楊香」とし、『原本』、『原編』、『璧』は「晉楊香」とし、『万』は「楊香」とする。『原本』、『原編』、『万』、『寛』、『璧』は「惟知有父、而不知有身」の句があるが、『掇』にはない。『掇』は『原編』、『原本』と同様に「虎磨旡而逝」とするが、『寛』では「虎亦靡然而逝」、『璧』では「虎亦摩旡而逝」、『万』のみは「虎亦曳去而逝」とする。『原本』、『原編』、『万』、『璧』は「父因得免於害」、『寛』は「父纔得免於害」とするが、『掇』にはこの句がない。このように『掇』は、『原本』、『原編』を参考にしつつ、一部改変を加えていると思われる。

第二十　孟宗

掇	哭竹生笋 呉孟宗、字公武。少喪父、母老疾篤。冬月思笋羹。宗無計可得、乃往竹林、抱竹而哭。須臾地裂、出筍數莖。持歸作羹以奉母、食畢疾愈。蓋其孝感天地也。按當時冬天無笋、今之冬笋自此始有。
原本	呉孟宗、字恭武。少喪父、母老疾篤。冬月思筍煮羹食。宗無計可得、乃往竹林、抱竹而哭。孝感天地、須臾地裂、出筍數莖。持歸作羹奉母。食畢疾愈。 涙滴朔風寒　簫簫竹數竿 須臾冬筍出　天意報平安
万	哭竹生笋 晋孟宗、字恭武。少孤、母老疾篤、冬月思笋煮羹食。宗無計可得、乃往竹林中、抱竹而泣。孝感天地、須臾地裂、出笋数莖。持歸作羹奉母、食畢疾愈。 詩曰 涙滴朔風寒　簫ヒ竹數竿 須臾冬笋出　天意報平安
寛	哭竹生笋 晋孟宗、少孤、母老疾篤、冬月思笋煮羹食。宗無計可得、乃往竹林中、抱竹而泣。孝感天地。、須臾地裂、出笋数莖。持歸作羹奉母、食畢疾愈。 詩曰 涙泪朔風寒　簫簫竹數竿 須臾冬笋出　天意報平安
原編	呉孟宗、字恭武。少喪父、母老疾篤。冬月思筍煮羹食。宗無計可得、乃往竹林、抱竹而哭。孝感天地、須臾地裂、出筍數莖。持歸作羹奉母、食畢疾愈。 涙滴朔風寒　簫簫竹數竿 須臾冬筍出　天意報平安

璧	晉孟宗、少失父、母老疾篤。冬日思笋煮羹食。宗無計可得、乃往竹林中、抱竹而泣。孝感天地、須臾地裂、出笋數莖。持歸作羹奉母、食畢疾愈。

六つの文献のうち、『掇』は『原本』、『原編』と同様に「呉孟宗」とするが、『万』、『寛』、『璧』は「晋孟宗」となっている。『掇』は「字公武」とし、『原本』、『原編』、『万』は「字恭武」とし、『寛』、『璧』はこの文字は見えない。『掇』は『原本』、『原編』と同様に「少喪父」とし、『万』、『寛』は「少孤」とし、『璧』のみは「少失父」とする。『掇』は『原本』、『原編』、『万』、『寛』と同様に、「冬月」とし、『璧』のみは「冬日」とする。『掇』は『万』、『寛』、『璧』と同じく、「笋」とし、『原本』、『原編』は「筍」とする。『掇』は「蓋其孝感天地也」とし、他の五文献は「孝感天地」とする。さらに、『掇』には「按當時冬天無笋今之冬笋自此始有」の句があるが、他の文献にはない。一方、関西大学総合図書館蔵『百孝圖説』に引用された孟宗の説話に「孫皓傳註曰孟宗母嗜筍、冬節將至時筍尚未生」と記されている[14]。この句は李文馥が加えた文と思われる。この文を除けば、『掇』は『原本』と『原編』と類似しているといえる。

三. 李文馥系の「二十四孝」と『日記故事』系の各文献の比較——図版について

本章では*Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）を『万』、『寛』、『璧』、『原本』、『原編』の六つの文献の図版と比較してみる。*Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）は近代以前、ベトナムにおける李文馥系「二十四孝」文献の中で惟一、図版を載せる版本であり、このベトナムで描かれた図版は他のどの文献を利用したのかを調べる必要があるからである。

Nhị thập tứ hiếu（『二十四孝』）は『原本』と同じように、図版に標題が記されている。しかし、『原本』では図の左（版心）に標題を縦書きで載せている。一方、*Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）では、図版の上に、横書きで漢字･字喃の標題を載せている。また、他の四文献の図には標題は記されていない。以下に各文献の図版を揚げ、その異同を示したい。

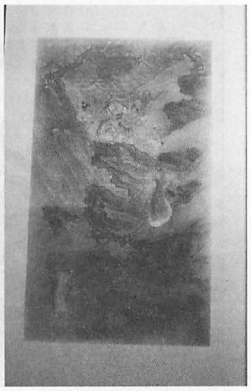
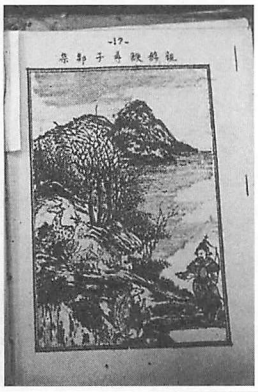
14）関西大学総合図書館蔵『百孝圖説』巻一元冊（LM2*ほ*23*18-1）、第6葉表。

第一　大舜説話の図版

	『万』	『寛』	『原編』
大舜			
	『壁』	『原本』	*Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）

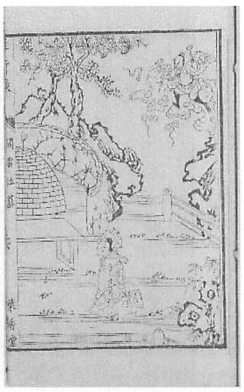
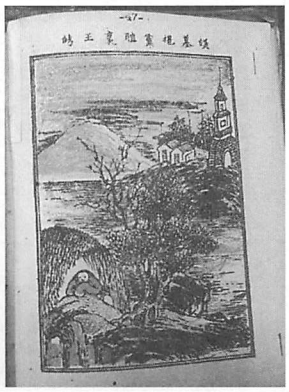
『寛』の図版は、舜帝が帝位につく場面を描いているが、他の文献の図版は畑で舜帝と象が耕す情景となっている。*Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）の図版は、舜帝の姿勢と立っている位置が『万』と類似しているが、情景の方は『原本』に近い。*Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）の図版は『原本』にもとづき『万』を参照したのではなかろうか。

第六　郯子説話の図版

	『万』	『寛』	『原編』
郯子			
	『壁』	『原本』	*Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）
			

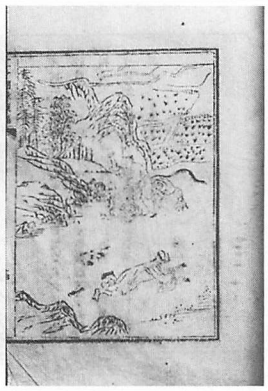
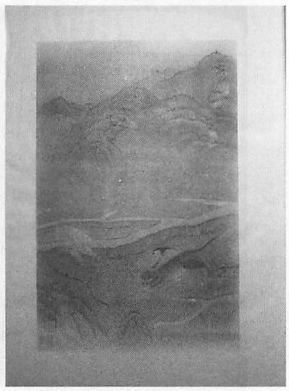
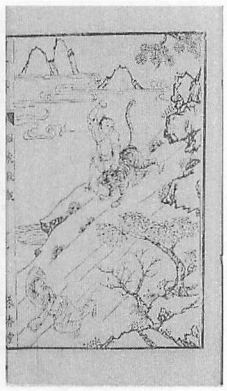
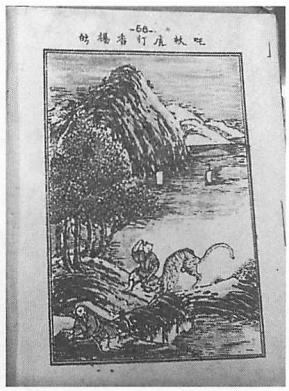
『寛』の図版は『原編』に近いが、『壁』の図は他の五文献と異同が多い。*Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）は図の背景、郯子の跪く姿が『原本』と類似しているため、*Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）は『原本』にもとづいて描き直したものといえよう。

第十六　王裒説話の図版

	『万』	『寛』	『原編』
王裒			
	『壁』	『原本』	*Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）
			

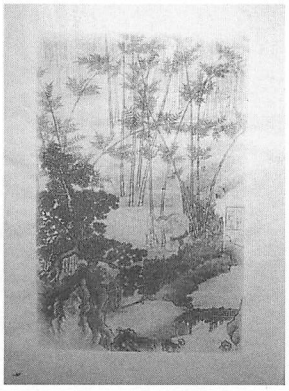
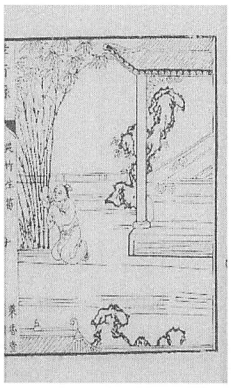
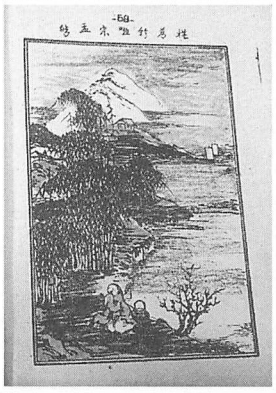
Nhị thập tứ hiếu（『二十四孝』）を除き、すべての文献の図版は王裒が母親の墓の前で跪く場面を描いている。『寛』、『原編』、『原本』には雲の上に雷の神様の姿が見えるが、『万』、『壁』には見えない。*Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）は他の五つの文献の図版と異同が大きい。ここはベトナムの独自のものがあるといえよう。

第十九　楊香説話の図版

	『万』	『寛』	『原編』
楊			
	『壁』	『原本』	*Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）
香			

『壁』の図は他の五つと異同が多い。『万』と『寛』は楊香、虎の姿が類似しているが、『万』では楊香が右手を、『寛』では左手を挙げている。『原編』のみは楊香が虎の背中の上に登り、虎の頭を押さえた場面を描いている。*Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）は楊香が虎を打っている姿、虎の姿、父親が倒れる姿勢が『原本』と類似している。*Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）は『原本』にもとづいて描き直したと指摘できる。

第二十　孟宗説話の図版

孟宗	『万』	『寛』	『原編』
	『壁』	『原本』	*Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）
			

『万』、『寛』、『原編』の図版では孟宗が竹のそばに座っているが、『原本』と *Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）では孟宗が竹の前に跪き、『壁』のみは孟宗が竹の側に立っている。*Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）は孟宗が跪いている姿が『原本』と類似している。*Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）は『原本』にもとづいて描き直したものと思われる。

おわりに

本稿では二十四孝説話のうち、五つの説話をとりあげて考察したが、いずれの説話も『二十四孝原本』所載のものと類似していることがわかる。ここでは詳論できないが、筆者の調査によれば、全二十四の説話のうち二十二の説話が『二十四孝原本』と類似している。つまり『二十四孝原本』が『掇拾雑記』の底本になったということができよう。しかし、注意したいのは『掇拾雑記』には李文馥が加えた文や省略があるため、『掇拾雑記』は『二十四孝原本』をそのまま踏襲したわけではないということであり、『掇拾雑記』は『二十四孝原本』以外に、他の文献も参考したことが指摘できる。

図版の場合も同様で、本稿でとりあげた五説話の図版はいずれも『二十四孝原本』に類似している。そればかりか、筆者の調査によれば、全二十四説話のうち十六の説話の図版が『二十四孝原本』に類似している。ただし、ベトナム独自の図版が五つあり、『二十四孝原編』に近い図版も三つある。すなわ

ち、*Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）は『二十四孝原本』を底本としつつも、他のテキストを参考にしており、総じてベトナム風の特色を描き出そうとしていたといえる。

このように『掇拾雑記』、*Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）に代表される李文馥系の二十四孝文献は本文、図版とも中国の『二十四孝原本』を底本としていた。しかし、それらは底本をそのまま踏襲したのではなく、他の文献も参照して加筆や省略を行うとともに、一定のベトナム的改変を独自に加えていることがわかるのである。